



須賀 廣

G5の編集にあたっては、主たるユーザーである高校生に本当に大切な情報を提供することを心がけた。ここではその一端を紹介したい。

私は中学校で2年間、高等学校で36年間、英語教師として毎日教壇で炭酸カルシウム(チョーク)の粉を浴びながら、「白墨人生」を送った。その間、英語教育法には実に様々な「流行」があった。

いったい、何が変わり何が変わらなかったのか。英語で意思疎通ができるとはどういうことか。38年間の経験から言えるのは、当たり前結論である。必要十分な語彙と文法能力を持ち、こちらに「言うべきもの」があれば、必ずコミュニケーションが成り立つ。あとは時にネイティブスピーカーと会話のキャッチボールをすればよい。会話を深めていくためにはそのテーマについての知識や自分なりの意見を持っていないといけない。うわべだけの会話表現だけでは、すぐに底をついてしまい、会話はとぎれる。

結局は、「極端に走るな」ということだ。それぞれがそれなりに存在意義を持っている。過去の英語教育は流行を追うばかりで、いずれも思ったほどの成果が出なかった。日本の英語教育が今後成果を出すためには、今一度、これまでの英語教育法を見直して、それぞれのメリットやデメリットを洗い直すことだろう。文法も必要、訳読も必要、そしてもちろんコミュニケーション能力も必要ということだ。

■訳文へのこだわり

G5では、英語だけでなく、日本語もできるだ

け自然で、高校生が理解しやすいものになるように工夫した。

例えば、G4では、

trade ㊦㊧㊨㊩ [相手と] 交換する [with] ||
If you prefer my gift, I'll ~ with you. ぼくの贈り物の方が気に入っているのなら、君のと交換するよ。

となっている(以降、G4・G5からの引用は語義・用例を主に示す、下線は筆者)。しかし、これでは「ぼくの贈り物」が「ぼくがもらった贈り物」なのか、「ぼくが人にあげようとしている贈り物」なのかがはっきりしない。そこでG5では「ぼくのもらった贈り物の方が気に入っているのなら、君のと交換するよ」に変えてその点を明確にした。

■頻度の重視

同様の表現が複数見られる場合は、使用頻度の多いものを優先した。例えば、G4の名詞 touch の語義2では、

touch ㊦㊧㊨㊩ [C] [U] … (仕上げのための) 加筆
|| I have to put [add] the finishing [final] ~es to this painting. この絵を仕上げるのに少し筆を入れなければならない。

となっていた。1つの文中に言い換え可能の情報を2つも入れることは、情報量が多すぎてかえって見づらい。そもそもこれら2つの言い換え表現は同程度によく用いられているのだろうか。例えばGoogleでは、それぞれの使用頻度は次の通りだった。

put the finishing touches to → 約330万例

put the final touches to → 約40万例

add the finishing touches to → 約200万例

add the final touches to → 約30万例

つまり, put を用いても add を用いても大差はないが, finishing と final では, その使用頻度に大きな差が見られる。この傾向は COCA 等のコーパスにも見られた。そこで G 5 では, finishing の入れ替え表現である [final] を思いきって削除し,

I have to **put** [add] **the finishing touches** to this painting.

と表記することで, 頻度の高い表現を残し, すっきりとした用例にした。このように G 5 では, 用例などを記述する場合, できる限りその使用頻度をチェックし, 頻度の高いものを優先するようにしている。

■異文化に関する注記の充実

文化の違いによく注意しないと, 思わぬ誤解が生じてしまうことがある。例えば, G 4 では wind⁴[名]の分離複合語に, 「～ chimes (ガラス・金属製の) 風鈴。」が載っている。これを見ると, ほとんどの日本の高校生は, 鉄製や陶器製の小さな釣鐘状のものから細長い紙が垂れている日本式の風鈴を思い浮かべるだろう。しかし西洋の風鈴はそれと全く形状が異なる。「風鈴」に当たる英語が, wind chime ではなく, wind chimes と複数形になっているところに注意してほしい。西洋の一般的な風鈴は, 鉄製 (ガラス製・木製もある) の円筒状の棒が何本もぶら下がっていて, 風が吹くと中央にある重りが周囲の棒に当たって音色を出す。こうした違いを理解するには, 上記の語義だけでは不十分である。そこで G 5 では次のような注記を設けた。

～ **chimes** (金属・木製などの) 風鈴《複数の円筒などに重りが当たって音を出すものが多い》。

■ネイティブスピーカーによるチェック

語義に適切な用例をつけることは辞書編纂で重要な作業の一つである。しかし, 短かくてしかも状況を瞬時に把握できる用例を作ることは至難の業である。また作成した用例が, ネイティブスピーカーが見て自然な英語でないといけな。これまでもそうだが, G 5 の用例はすべて信頼できるネイティブスピーカーのチェックを受けている。

例えば, cost [名]の項で, 次のような例文を作成した。

It is necessary to protect the environment whatever the cost.

すると, ネイティブスピーカーはこれを次のように訂正した。

Whatever the cost, we must protect the environment.

もとの用例は文法的には問題ないが, 全体として「弱すぎる」というのだ。whatever the cost という成句はもっと強制力のある文の中で用いる方が自然らしい。

高校生は, 英文を読む途中でわからない単語に出会ったときに, G 5 を引く。そしてそこにまさに望んでいた訳語や用例が載っている——そのような辞書になるように努力した。また, 英和辞典は未知の単語を引くためにだけあるのではない。時間があるときには, 辞書を拾い読みするのもまた楽しい。読むたびに新たな発見がある。私たちの世代は, 紙の辞書を引き, 赤ペンで下線を入れ, しだいにどのページもピンク色に染まっていくのを見て, 自らの英語力の進歩を自覚した。辞書を使い込み, 手になじんでくるにつれて, 紙と紙の摩擦が取れ, 片手の指一本で一枚一枚をめくることができるようになっていくことに喜びを感じた。日頃英語と格闘している高校生にこそ, この G 5 を片手に, 英語の海へと漕ぎ出していただきたい。

(すが ひろし・川崎医療福祉大学学生課)